瑞穂丘物語

表題は 1968 年刊行「八高創立 60 周年」記念誌である。八高について何回かレポートしてきたが、興味深い箇所を紹介したい。

八高敷地の全容（撮影当時は名古屋大学教養部・現在は名古屋市立大学が使用している）

第三師団、第八高等学校とならべてみて、なにか妙だとは思いませんか。小島広次氏（36 回文甲。先生は名古屋市立女子短大時代の先輩・同僚で、専門は日本史）クイズのようなことをいうのである。初手からタネ明かしをせずにまず相手に考えさせようというやり方は、この人の悪いくせだが、わたしは以前に歩兵第六連隊物語というのを書いたことがあるので、第三、第六、第八というのは悪いしゃれだと思った。「だって、そうでしょう」と小島講師はたたみかけていった。

「軍隊ばかりが三番目にできて、学校の方はどうして八番目なんです。そこに、名古屋という都市のなにか秘密を感じませんか」　ナンバースクール八校（順に、東京・仙台・京都・金沢・熊本・岡山・鹿児島・名古屋）のうち、大阪、福岡は入っていないし、神戸、横浜などは最後まで影も形もない。それに九州には八校のうち二校までがある。

「どうも推理の域を出ませんが」と前置きして小島講師はこう語っている。「明治維新とかなんとかいうより、伝統のある城下町を中心に選んでいったんじゃないか、といえそうです。その点、名古屋は軍事都市としては第三番目にランクされても学都としては八番目くらいの値打ちにしか見られていなかったようですね。そのころからすでに名古屋は商人の都、商業都市的性格で格づけされていた証拠であるといえますね。大阪の評価というのは同じ理由でもっと重症だったからでしょう。こういってはいけないかもしれないが、名古屋という都市は東京、京都、それから地方の骨っぽい城下町とくらべて、学生にとっては決して完全に住みよい町ではなかったようですからね。そのことは現在でも、ほとんど変わりません」

第八高等学校が南外堀町の仮住まいから、名古屋市外呼続町大字瑞穂の新校舎に移ったのは明治 42 年 12 月のことであった。瑞穂ケ丘は大根畑のまんなかにあった。低樹林と草むらに覆われた赤土の丘は、その鈍い起伏の間にガラスの破片に似た小さな池をいくつも隠していた。一番

大きいのが広見ケ池であった。秋になると、丘から見える松という松の枝は白い裸形の大根の林に変わった。無頼な裸身を無感動に投げだす白い行列は目の続くかぎり続いた。乾し終わった大根は農家のひさしまで届くような大樽に漬けられる。有名な御器所大根の本場である。

帽子に二条の白線、破れ袴をひるがえしながら、怒ったように、それでも天下を取ったように、農道を行く八高生たちを見て、大根畑で腰をのばした御器所村のひとたちは指をさして、ささやきあった。「ああ、であ八さんが通る」この際、名古屋弁というのは、活字になりにくいという理由で困るのである。“であ八さん”というのは”第八さん”のことなのである。

この記念誌のなかに島恭彦先生(21 回文甲)も登場する。記念祭で島恭彦氏の発想はつねに妙意をえたものであった。島案の代表作に「人類行進曲」という大作があった。山口一夫さんによると、「これは過去・現在・未来に及ぶ人類の運命を示したもので、島構想のヤマは現代の苦悩の表現にあった」ということになる。キリストではない。ひとりの現代人が十字架にかけられている。彼に向かって数本のヤリの穂先が集まっている。そのヤリは受験難、就職難、結婚難、生活難というわけである。これが現代人の背負う原罪であった。現代は、この島構想がすんなりと通ったが、未来篇では異論が分かれた。

補遺「八高古墳と石器」も興味深い。なお、八高古墳(円墳のほう)にある八高生記念碑のカラ―写真は筆者撮影による。

(2016 年 6 月 28 日)